

小・中学校における古典の授業展開力の養成

小島 明子

(キーワード：国語科教育、古典学習、教材研究、教育大学、教育学部)

はじめに

平成二十年(二〇〇八)三月に告示された「新学習指導要領」による教育課程が小学校・中学校・高等学校、それぞれにおいてスタートしてから数年が経過した。周知のことではあるが、国語科、特に古典教育で特筆すべき変化は、「話す・聞く、書く、読む」の三領域と「言語事項」というかつての構成が改められ、上記の三領域と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が置かれたという点である。しかも、小学校においても「伝統的な言語文化」に関する事項が以下のように明記され、古典教育が導入されたことも、従来とは大きく一線を画するものであった。

【第一・二学年】

(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。

【第三・四学年】

(ア) 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。
(イ) 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。

【第五・六学年】

(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。
(イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のもの見方や感じ方を
知ること。

続いて、中学校についても「伝統的な言語文化」に関する事項を引用しておく。

【第一学年】

(ア) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。

(イ) 古典には様々な種類の作品があることを知ること。

【第二学年】

(ア) 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。
(イ) 古典に表れたもの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。

【第三学年】

(ア) 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。
(イ) 古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと。

これらを見ると、小・中学校における古典教育は、概ね古典に「慣れ親しむ」ための指導が中心となっていると総括できよう。こうした「新学習指導要領」に

基づく教育課程の中で、現場の教員の暗中模索あるいは創意工夫の姿を見る機会も多数あった。また、国語科教育の分野からの研究成果の発信も盛んになされてきている。^(注1)なお、平成二十九年(二〇一七)三月にはさらに新たな「学習指導要領」が告示されたが、「伝統的な言語文化」の事項には、内容的には大きな変更はない。^(注2)

翻って、教員をめざす学生たちはどのような状況であるのだろうか。稿者は、鳴門教育大学という地方の単科教育大学において、古典文学に関する「教科専門」の立場から学生(ここでは学部学生とストレートマスターの院生を総称する)の教育にあたってきた。鳴門教育大学の場合、国語科教育コースに所属する学部の学生は、一年次の後期より小学校教育専修と中学校教育専修に分かれるのであるが、その割合はほぼ二対一である。例外もむろんあるが、概して小学校教育専修の学生は、古典文学の授業に対して熱意を抱きにくく、かつまた実際の読解力も乏しいように感じられる。また中学校教育専修の学生であっても「古典は苦手です」「嫌いです」と平気で口にする者もいて、学生のモチベーションの維持を度外視できない状況となっている。加えて、当然ながら、小学校教員の場合は全科科を担当するため、国語科教育コースに所属する学生以外も将来、小学校の教壇で古典を扱うことになるのであるが、他コースの学生で古典文学の授業を受講する者はかなり少数であるという点も問題として挙げられる。^(注3)

本稿は、小学校・中学校の教員をめざす上述のような状況の学生たちに、如何にして古典の授業を展開する力をつけさせることができるかを考察する。古典文学の科目提供にあたってきた立場から、「小・中学校における古典の授業展開力の養成」について、具体的な提言をなすことを期するものである。

一 和歌の学習指導

小・中学校の国語の教科書には、古典教材として和歌は必ず取り上げられるのであるが、ここには一つの顕著な傾向がある。「四季の歌」あるいは「折々のことば」といった項目が立てられ、「春」の歌が何首か挙げられ、次には「夏」の歌が何首か並び、続いて「秋」の歌、「冬」の歌がやはり数首ずつ提示されるという形式である。そして、それぞれの季節の歌の中には、『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』を出典とする和歌が混在して列挙されているのが常である。さ

らに言えば、高等学校の教科書でもこの形式が踏まえられている場合がかなりあり、学生たちは、古典の和歌について概ねこのような形式によってのみ学んできた者が大多数を占めることになる。^(注4)

その結果、学生たちの中に、古典の和歌はどのように位置づけられてくるのであろう。以下は、鳴門教育大学の学生たちが書いた和歌についての学びの印象である。

○中学・高校で「万葉集」や「古今和歌集」をやったが、同時に授業で取り扱われ、漠然と「和歌」というイメージしか持っていなかった。

○高校時代は、歌の授業が「訳して終わり」というものであった。

○正直、和歌はただ読んで品詞分解して理解するというのが、高校までだった。だから、万葉集も八代集の最も古いもの、というだけのイメージであった。

一番最後の学生のコメントは、『万葉集』を所謂「八代集」(『古今和歌集』から『新古今和歌集』に至る八つの勅撰和歌集)の最初のものと同混しているという問題もあるのだが、それはひとまず除外しておくこととして、これらの学生のコメントからは、次のような共通の現状が浮かび上がってくる。

○「和歌」という単型詩の形式で一括りにされた授業を小・中・高校で受けてきたため、古典作品の成立の流れや前後関係の有機的な繋がりがつかめていない。

○「古典文法」「古文単語」を中心にして学び、「品詞分解」と「口語訳」が目的化している。

ちなみに、後者については、菊川恵三氏が二〇〇九年に以下のような言をなしているのが実に示唆的である。^(注5)

ひとつ予想していることがある。おそらく、一部の進学校を除く多くの高校では、この文法(品詞分解)と現代語訳というのは、機能しにくくなっていくのではないかと。というのも、教育学部学生の文法力は二〇年前から高いとは言えず、しかも漸減の傾向にあるからだ。国語の免許を取得しようとする学生の力がこれでは、現場はさぞ大変だったろう。……「文法と現代語訳」の古い授業を槍玉にあげても、そのような授業が成り立つのは少数派になりつつあるのではないだろうか。

和歌山大学教育学部に二十年にわたって勤務し、教員養成に携わってきた菊川氏

の発言であるが、現時点での鳴門教育大学の学生の事態ともまさしく重なり合うところがある。すなわち、小・中学校の古典の授業を果したるかたちで展開するために、まずは教員を志望する学生の古典に対する意識を変化させ、かつ古典への理解力を相当に高めることが必要であるという、きわめて当然とも言える課題に直面することになるのである。

こうした現状を踏まえて、鳴門教育大学で稿者が実施している和歌に関する授業は、『万葉集』『古今和歌集』についてそれぞれを学ぶ時間を設けるといふ至極平凡な、しかしなされるのが意外に少ない取り組みである。以下、それについて簡単に紹介しておきたい。

まず、『万葉集』についての授業では、固有の文字を持たなかった古代の日本人が、漢文を使用する段階から、万葉仮名が成立するという背景を説明する。また『万葉集』の成立時期・編者・集められた歌の範囲などの基礎知識にも触れることは言うまでもない。

その後、第一に、『万葉集』の技巧というテーマを提示する。主要なものは、以下のような「枕詞」（傍線部）と「序詞」（波線部）である。

⑦あをによし奈良の都は咲く花の薫ほふがごとく今盛りなり

（卷三・三二八 大宰少弐小野老朝臣）

⑧玉たま縷いとかけぬ時なく恋ふれどもなにしか妹に逢ふ時もなき

（卷十二・二九九四 読み人しらす）

⑨あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む

（卷十一・二八〇二別歌 柿本人麻呂）

ただし、これの中・高校で一般的に行われているように「枕詞・序詞はそれ自体に意味はなく、下に来る特定の語を導くために用いられる」と、その機能のみを説明してしまうのは意味がない。

「枕詞」についてはなぜ「枕詞」が成立したかを説明した後、⑦歌の単純かつ一般的な「枕詞」から、⑧歌に見られるような一回性の比喩的「枕詞」への変化に着目させ、その上で後者が⑨のような「序詞」に近づいてゆく変化を示す。その流れから、「枕詞」「序詞」については、従来の決まり切った説明では十分ではないことを示す。特に後者に関しては、「序詞【自然・景物】と被序詞【人間・心情】の働きが形成されること、それ故に共感性・感覚性の高い表現であること」を理解させるのが重要である。

そのためには、代表的な「枕詞」「序詞」を含む和歌を何首か選び出して置き、それぞれの語からどのようなイメージを膨らませることができているかを学生自身に考えさせることが肝要であろう。その積み重ねによって、学生は語感を磨くこととなり、それが和歌の鑑賞力を高めることに繋がってくる。

第二に、『万葉集』の歌の種類というテーマを挙げる。そしてその一つ目の分類基準が【歌の形式による分類】である。所謂「短歌」（五・七・五・七・七）の他に、「長歌」（五・七・五・七・五・七……五・七・七）があることを知識として知るだけでなく、「長歌」のもつ情報の多彩さ、構成の巧みに目を向けさせる。このためには、実際に構成を図式化してみることは有益である。また、二つ目の分類基準として【歌の内容による分類】を示す。代表的なものが「相聞」「挽歌」「雑歌」であり、「東歌」などにも触れたいが、特に「相聞」「挽歌」は以下のような例歌を挙げて、その特徴を学生たち自身に考えさせる時間を設ける。

相聞

あしひきの山のしづくに妹待つと我立ち濡れぬ山のしづくに

（卷二・一〇七 大津皇子）

恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽くしてよ長くと思はば

（卷四・六六一 大伴坂上郎女）

挽歌

うつそみの人なる我や明日日よりは二上山を弟と我が見む

（卷二・一六五 大伯皇女）

降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに

（卷二・二〇三 穂積皇子）

これら『万葉集』の歌は、素朴で率直であるため、多少の助言を与えることで学生が自分自身で鑑賞をすることが可能である。自分の力で古典の和歌を読解し、そこに共感であれ、違和感であれ、それぞれの思いを抱くという主体的な体験は、古典学習の楽しさを実感する第一歩となると考えている。

続いて、『古今和歌集』の授業に移るが、これもその成立時期・成立の背景・巻数や歌数・編者などの知識を提示する。その上で、『万葉集』の際と同様に、まず技巧についての理解を深める。『万葉集』に顕著であった「枕詞」「序詞」の二つの技巧は継続してあるものの、むしろ新たな特徴的な技巧が出現し、多用さ

れてゆく変遷に目を向けさせる。その技巧の一つ目は「掛詞」(二重傍線部)である。

花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに

(卷二・春下・一一三 小野小町)

ふる	降る	ながめ	長雨
古る	眺め		

この小野小町の歌では、「ふる」が「降る」「自然・景物」と「古る」「人間・心情」の「掛詞」であり、「ながめ」は「長雨」「自然・景物」と「眺め」「人間・心情」の「掛詞」である。すなわち、「自然・景物」と「人間・心情」が重ね合わされ、わずか十七文字に凝縮せざるを得ない和歌の表現世界を豊かなものに行っていることに目を向けさせる。

そしてそれを、二つ目の技巧である「縁語」に繋げていく。

唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

(卷九・羈旅・四一〇 在原業平)

この在原業平歌の場合、「掛詞」が五箇所指摘できるのであるが、それが互いに意味的に繋がりが合う「縁語」となる。先にも述べたように「掛詞」は「自然・景物」と「人間・心情」に分けられるが、「縁語」は「自然・景物」に主に関わって生じることを示してゆく。この段階に至って学生は、ほとんど意味を持たない記号のように見えていた表現技巧が、人間の心の變を表現するという和歌の本質に関わっていることに気づかされるのである。

さらには、三つ目の技巧として「擬人法」、四つ目の技巧として「見立て」も示し、漢詩文の影響も合わせて学習させてゆく。

擬人法

久方のひかりのどけき春の日に静心なく花の散るらむ

(卷二・春下・八四 紀友則)

見立て

あさほらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪

(卷六・冬・三三二 坂上是則)

第二に、『古今和歌集』の【歌の内容による分類】に移り、やはりその特質を推測しやすい以下のような「相聞」「哀傷歌」を取り上げてゆく。

相聞

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを

(卷十二・恋二・五五二 小野小町)

哀傷歌

みな人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ

(卷十六・哀傷歌・八四七 僧正遍昭)

既に『万葉集』の歌でその概要をつかんできた学生たちは、それらと比較しながら『古今和歌集』の歌の特徴を読み取る。両者の差異を発見することも、きわめて容易となっているのである。

以上が、稿者の授業の大まかな道筋である。実際に授業を行った後に学生たちに振り返りをしてもらったが、その一名の学生の文章を引用しておきたい。

歌集にはそれぞれテーマや特徴、個性があり、そこには時代背景もからんでいるという理解は自分にとって大きなものだったと感じる。

教員を志す学生自身が、字面ではなく「腑に落ちる」状態で理解できていないことを、小・中学校の教育現場で児童・生徒に教えることは不可能であろう。小・中学校における古典の授業展開力を考える場合、教員志望の学生が体感として古典のおもしろさを知る、興味を抱くという学習過程を持つことこそが、先決の課題であることが共有されねばならないのである。

二 随筆の学習指導

前章で述べたことを踏まえてみると、教員をめざす学生に提供する古典の授業では、次のような到達目標が求められると稿者は考えている。

- ① 古典文学史の大きな流れを理解する。
- ② 一つ一つの古典作品の特質に気づき、そのおもしろさの一端に触れる。
- ③ 古典文学作品の理解の基盤となる社会背景・政治動向・時代思想などに目を向ける。
- ④ 上述の①～③を通じて授業実践に必要な基礎力を身につける。

この中で、①②については前章でも提示し得たが、③についてはさらに説明を要すると思われる、本章で随筆を例にして詳述したい。

小・中学校の教科書で、まずは取り上げられる随筆は『枕草子』であろう。特

に冒頭の段「春はあけぼの」は定番教材である。一フレーズが短く、古典に特有の助動詞などが少ない読みやすい文体と、四季という普遍的なテーマ性がその要因であろう。この段を音読・暗誦し、その魅力を考えさせ、さらには「自分流」春はあけぼの」を書かせる、というのがしばしば見られる授業案である。

ただし、『枕草子』はこうした段からのみ成り立ってはいないことをまず学生に知ってもらう必要がある。小・中・高校では言及されることが少ないが、『枕草子』は次のような三種類の諸段から構成されている。

○「類聚章段(ものづくし章段)」

「虫は」「木の花は」「すさまじきもの」「うつくしきもの」など

○「随想章段」……日常生活や四季の自然を観察した章段

「春はあけぼの」など

○「日記・回想章段」……中宮定子周辺の宮廷社会を振り返る章段

実は、「春はあけぼの」のような「随想章段」は『枕草子』ではそれほど大きな割合を占めてはいない。むしろ、『枕草子』の作者である清少納言の姿に迫ることができるのは、「日記・回想章段」で、それらを学ぶことは、本章冒頭に挙げた到達目標の③に関わるものである。

具体的には、第一のポイントとして、清少納言が女房として仕えた、一条天皇の中宮である定子(藤原道隆女)とその一家・中関白家のさまを読み取ることが挙げられよう。

清少納言が、定子に初出仕したのは正暦四年(九九三)ごろと考えられていて、この年とすれば定子は十七歳(数え年)である。清少納言は、生年に諸説あるが、仮に夫となった橘則光より一年下とするなら康保三年(九六六)生まれとなり、初出仕時には二十八歳(数え年)となる。そして、出仕後ほどなくの記事とされるのが、以下に引く、二八〇段「雪のいと高う降りたるを」である。

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などしてあつまりさぶらふに、「少納言よ。香炉峰の雪はいかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。人々も「さる事は知り、歌などさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人にはさべきなめり」と言ふ。

中宮定子の問い(傍線部)に対して、清少納言は『白氏文集』(第十六)の「香炉峰ノ雪ハ撥テ簾ヲ看ル」の一節を口ずさんだり、和歌に詠み込んだりして答えるこ

とはせず、そのさまを行為によってデモンストレーションした(波線部)。人々が賛美したのもこの一点である。しばしば機転・機知と解説されるが、漢詩文を知識として知っているのは当たり前、それをいかに血肉とし、場にふさわしく示すことができるかが重要である、とまずは学生に読ませる。

その上で、同様の主旨の段が『枕草子』中にいくつもあるものを補足するとよいと思われる。その一例が、二二一段「清涼殿の丑寅の隅の」で、中宮定子は女房たちに白い色紙を差し出し、「これにただいまおぼえむ古きこと一つづつ書け」と、言うなれば「テスト」を試みる場面を描く。上臈女房が春の歌や花の歌を書く中で、清少納言は『古今和歌集』(春上)に採歌された藤原良房(文徳天皇皇后・明子の父)の歌「年経ればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし」を「君をし見れば」と改めて書いて、中宮のお褒めに与ったという段である。

高校時代に二八〇段・二二一段などを読んで、『枕草子』はこうした類いの清少納言の自慢話ばかりで、嫌になったと言う学生もいるのであるが、これはそうではないことに気づかせたい。当たり前の対応を超越した立ち居振る舞い、求められるものを的確に察知し、かつ動くことのできる機敏さ、そしてそれらを支える文学的知識、これらを重要視したのは中宮定子である。清少納言は、釈迦ならぬ中宮定子の掌の上で転がされる孫悟空的存在として『枕草子』には描かれるのである。

さらに言えば、中宮定子のそうした美質は、おそらく父・藤原道隆の血を色濃く受け継ぐものであると思われる。例えば、二六〇段「関白殿、二月二十一日のほどに、法興院の」は、道隆が女房たちを相手に次のような冗談を言うさまを書き留める。

〔中宮様は…稿者注〕いかにいやしく物を惜しみせさせ給ふ宮とて、われは宮の生まれさせ給ひしよりいみじうつかうまつれど、まだおろしの御衣一つ給はらず。なにか、しりう言には聞えむ〕

中宮の位に登りつめた我が娘を「おとしめネタ」にして冗談を言うことのできる関白道隆の屈託のなさがあるが、その実、中宮に仕える女房たちの一斉の笑いを誘い、和気藹々とした場を作ることをねらった配慮も見え隠れする。定子の、ひいては定子サロンの機知・機転、あるいはパフォーマンス重視という姿勢は、ことごとくこの道隆に由来しているよう。

そしてここまでの「日記・回想章段」を学生たちに理解させれば、「春はあけぼの」の段が、所謂「平安時代の美意識の象徴」などではないということに、自ずと考えが至るはずである。春なら桜、夏ならあやめ・ほととぎす、秋なら紅葉が一切語られない「春はあけぼの」の真価はそこにあるのであり、学生たちが教員となって小・中学校で「自分流『春はあけぼの』」を児童・生徒に書かせる際の指導も自ずから異なってくることとなる。

また、「日記・回想章段」を学ぶ第二のポイントとしては、中関白家の衰退という歴史的事実と、『枕草子』の叙述に不可分の関わりがあることを理解することが挙げられる。

あまり意識せず『枕草子』を読むと、中宮定子の華やかで繁栄した宮中生活だけが読後感として残るのであるが、実は定子の周辺は長徳元年（九九五）四月の関白道隆の病死をもって、急速に暗転していた。翌長徳二年（九九六）一月、定子の兄弟である伊周・隆家の従者が花山院に矢を射かけ、同年四月、二人の配流が決定する。その翌月には定子は落飾するのであった。先に述べたように清少納言の初出仕を正暦四年（九九三）と見れば、清少納言が中関白家の光輝の恩沢に浴した月日はごく短い。

ただし、清少納言は関白道隆の死をごくあっさりとして記すのみである。一三七段「殿などのおはしまさで後」の冒頭がそれで、「殿（道隆：稿者注）などのおはしまさで後、世の中に事出で来、さわがしくなりて」とあるものの、その後は風雅な中宮定子の住まい、里居の清少納言に対する中宮の気遣いに話題が移ってゆく。また、伊周・隆家兄弟の一件にも、中宮定子の落飾にも『枕草子』はまったく言及していない。代わりに、二五九段「御前にて人々とも、また物仰せらるるついでなどにも」、一三〇段「頭の弁の、職にまゐりたまひて」、一三一段「五月ばかり、月もなういと暗きに」、一〇二段「二月つごもりごろに、風いたう吹き」など職御曹司や今内裏を舞台とする中宮定子のサロンのさまが描かれ、清少納言が得意の機軸を披露する段が点在するのである。

このあたりは、学生たちに『枕草子』の内部から情報を汲み取らせるのみでは不十分で、外部から情報を補う必要がある。長保元年（九九九）十一月には、十二歳の道長女・彰子が、女御として一条天皇に入内し、その傍らでは中宮定子が敦康親王を産んでいる。翌長保二年（一〇〇〇）二月に、今や最高権力者となつた道長の強引な策謀で、中宮定子は皇后に転上、一方、女御彰子は中宮となり、

一帝二后並立状態が出現する。そして同年十二月、皇后定子は嬪子内親王を出産し、二十四歳でその生涯を終える。

『枕草子』は、如上の一連の動きについても、やはり何の記載も残さない。鎌倉時代初期に書かれた評論の書『無名草子』は、こうした清少納言の姿勢に対し秀逸な評を残している。

宮（定子：稿者注）の、めでたく、盛りりに、時めかせたまひしことばかりを、身の毛も立つばかり書き出でて、関白殿（道隆：稿者注）失せさせたまひ、内大臣（伊周：稿者注）流されたまひしなどせしほどの衰へをば、かけても言ひ出でぬほどのいみじき心ばせなりけむ人の……

つまり、清少納言は『枕草子』に敢えて中関白家の繁栄や中宮定子の素晴らしさだけを記したのであり、その衰退の様子は意識的に描かなかつたことが窺い知れてくる。そして、その心根を『無名草子』は賛美しているのである。

何を描き、何を描かないか、これは文学作品ではきわめて重要な問題である。本章冒頭に挙げた③に戻るが、「古典文学作品の理解の基盤となる社会背景・政治動向・時代思想などに目を向ける」ことは、その問題を解明するキーを提示してくれるのである。

小・中学校では『枕草子』は冒頭「春はあけぼの」をはじめとする「回想章段」、および「類聚章段」（ものづくし章段）の「ごくごく一部のみが教材となる。しかし、そののみしか読んでいない教員、すなわち小・中学生と同じレベルに留まる教員では、作品のおもしろさ・豊かさを児童・生徒に伝えることは困難であることは疑いない。作者はどのような人間なのか、どのような時代に生きたのか、何を重視し、何のために作品を書いたのか。こうした疑問を抱く機会が、何より教員をめざす学生自身に必要なことである。その疑問に対し、自ら頭をひねり、考えあぐねた体験の積み重ねがあつてこそ、小・中学校の教育現場において生きた授業が展開され得るのである。

三 物語の学習指導

高等学校において、古典の物語としては、歌物語の『伊勢物語』『大和物語』、古典を代表する長編の作り物語『源氏物語』、歴史物語の『大鏡』、軍記物語の『平家物語』などが教科書に採録されている。やはりそれぞれに定番の箇所があり、

その授業案の提案も相当な累積がなされている。ただ、一章段、あるいは抜粋された短い一節を読むことが常であり、鳴門教育大学に進学してくる学生たちも、物語全体の話の流れや構成の中に、自分が現在読んでいる短い箇所がどう位置づけられているかを読み取ることは、当初ほとんどできない状態である。

物語を読むことは、古く『更級日記』の作者・菅原孝標女が記すように本来、この先はどうなるかという期待に胸をときめかすことが最大の喜びのほうである。しかしながら、教員をめざす学生たちに長編の古典の物語を読むように求め、時間的な制約・古文の読解力の不足から、それは難しいことも事実である。そこで、古典作品で短いものを選び、できれば全文、無理な場合は可能な限り全文に目配りをしたかたちで読ませることで、古典への認識を変容させることも必要となってくると稿者は考える。

その一つとして、『竹取物語』の授業を例に挙げたい。^(注8) その作者・成立年代は明らかではないので簡単に触れるのみとして、『竹取物語』の概要を次のように分解して見ることが手ははじめとなる。

- (1) かぐや姫の生い立ち……………仮生説話(譚)・致福説話(譚)
- (2) 貴公子たちの求婚……………求婚難題説話(譚)の序
- (3) 石作の皇子
- (4) くらもちの皇子
- (5) 右大臣安倍御主人
- (6) 大納言大伴御行
- (7) 中納言石上麻呂足
- (8) 帝の求婚……………求婚説話(譚)
- (9) かぐや姫の昇天……………昇天説話(譚)
- (10) 富士の煙……………地名起源説話(譚)

こうして『竹取物語』が、部分部分の話型(譚)の累積から成り立つことを見て取らせる。これならば、『竹取物語』全文を読むことができなくても、全体のどこに今自分が読んでいる箇所があるのかが可視化できる。また、この話型は、物語を読み解く際に普遍的に用いられる一つのツールであり、それを説明することで、学生たちが他の物語に関心を持つことも少なくなる。

次には、『竹取物語』の前半部の大半を占める求婚難題説話(譚)に移り、それを分析させてみる。以下のような表にまとめさせるのも有効であろう。

求婚者	課された品	結末	語源説話	注目点
石作の皇子	天竺にある 仏の御石の鉢	大和国の山寺の寶頭盧の 前の鉢で代用	はちを捨つ	
くらもちの皇子	蓬萊山の玉の 枝	作物所の工匠に作らせる	たまさかに	
右大臣 安倍御主人	火鼠の皮衣	唐土の交易船の主(王慶) に購入を依頼	あへなし	
大納言 大伴御行	龍の頸の 五色の玉	家来を派遣 失敗 ← 自ら筑紫の方の海に漕ぎ 出す	目に李のような二つ の腫れ物 ← たへかた	
中納言 石上麻呂足	燕の 子安貝	家来を遣わす 失敗 ← 自ら籠に乗り、大炊寮の 屋根に上がる	墜落、腰が折れる ← かひあり・なし	

求婚難題説話(譚)の中に、語源説話(譚)が入りこんでいることもわかる部分で、本来、日本語表記は清濁を持たないことが、これを成り立たせる要因であることにも気づかせたい。さらには、五人の求婚者たちの属性や難題への対応の仕方を比較することによって、五人は二つのグループに分類できることに目を向けさせる。その上で、かぐや姫が五人の貴公子に難題を求める、以下の箇所を読みたい。

(かぐや姫は：稿者注)石作の皇子には、「仏の御石の鉢といふ物あり。それを取りて賜へ」といふ。くらもちの皇子には、「東の海に蓬萊といふ山あるなり。それに銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらん」と言ふ。いま一人には、「唐土にある、火鼠の皮衣を賜へ」大伴の大納言には、「龍の頸に五色に光る玉あり。それを取りて賜へ」石上の中納言には、「燕の持たる子安の貝取りて賜へ」といふ。

ここでも、難題を求める場面での言葉の使い方が、前の三人と、後の二人では微細ながら異なっていること、そしてそれが先に見た二つのグループと重なっていることなどを読み取らせる。この箇所のもとめとしては、『竹取物語』に、この求婚難題説話（譚）が盛り込まれた理由について考えることも必要となる。

ここまで十分に読み取りができると、五人の貴公子の求婚難題説話（譚）とその後続く帝の求婚説話（譚）を比較することは、学生たちにもそう難しいことではなくなってくるであろう。以下の箇所は、帝の性質を汲み取る場合には格好の箇所であると考えられる。

（帝は：稿者注）つねに仕うまつる人を見たまふに、かぐや姫のかたはらに寄るべくだにあらざりけり。……かぐや姫のみ御心にかかりて、ただ独り住みしたまふ。よしなく御方々にも渡りたまはず、かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きてかよはさせたまふ。御返り、さすがに憎からず聞こえかはしたまひて、おもしろく、木草につけても御歌をよみてつかはず。

それぞれの学生に考えてもらおう課題としては、帝とかぐや姫はどのような関係か、という点がまず挙げられる。同時に、そうした関係は、なぜ生じ得たのかという点にも目を向けさせ、読みの深化を図る。

その後は、かぐや姫の昇天の部分に移るが、ここでは以下数箇所の重要な読みどころに触れるのが不可欠である。

○（天人の王は：稿者注）「かぐや姫は罪をつくりたまへりければ、かく賤しきおのれがもとに、しばしおはしつるなり。……」といふ。

○一人の天人いふ、「壺なる御葉たてまつれ。穢き所のもの、きこしめしたれば、御心地悪しからむ物ぞ」とて、持て寄りたれば……

○（天人がかぐや姫に：稿者注）天の羽衣うち着せたまつれば、翁を、いとほしく、かなしと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、のほりぬ。

これらから、描かれる此界（人間界）と異界（月の世界）の非対称性に気づくこと、そしてそれぞれの世界がどのような価値観のもとに成っているかを考えることは、物語を読み解く力としてきわめて重要である。

これらを学んだ後に、絵本などに書き換えられた「かぐや姫」のお話と、古典の『竹取物語』の比較をさせる。双方の相違点は何か、という課題がまず浮上するが、既に見てきた箇所はもとより、『竹取物語』掉尾には、帝が不死の薬を富

士山で焼かせるといふ「かぐや姫」のお話には一般的にはない部分が置かれることも大きな相異点である。比較の対象が存在することは、学習において大きな意味があり、これらの差異に着目することによって、古典の『竹取物語』の主題、あるいは『竹取物語』が「かぐや姫」のお話を凌駕している点を、学生たちは自身自身の力で見つけ出すことが容易になるのである。

さらに言えば、古典文学全般を見回すと、全文を読むことが苦にならず、かつ古典の物語のおもしろさに開眼しやすしいものがまだ見出せる。例えば、教科書にはほとんど取り上げられることがないのであるが、『御伽草子』にはそうした学びにふさわしい話がいくつかある。

ちなみに『御伽草子』は、広義では室町時代から江戸初期に作られた物語草子の総称であり、狭義では享保年間に、大坂心齋橋の書肆・渋川清右衛門が刊行した物語草子二十三編を『御伽草子』または『御伽草子（草紙）』と名づけたことに由来している。このうち、日本古典文学大系『御伽草子』に所収された「浦島太郎」「一寸法師」は同書とともに八頁ずつで短く取り扱いきやすい。「鉢かづき」になると十八頁、「物くさ太郎」になると二十一頁となり、かなりの分量となってしまう難がある。

この『御伽草子』については、演習の時間に、学生たちに以下のような課題を出し、発表してもらおうことも大学の授業で行ったことがある。

① 担当の古典作品がライトされている絵本を紹介

② 担当の古典作品と絵本との比較（享受と変遷の相の検討・その一）

③ 上記②を理解するため、時代的な背景を中心とする調査

④ 先行の文学作品との比較（享受と変遷の相の検討・その二）

⑤ 担当の古典作品が生み出された精神的背景を考察

この学びは、小学校の「学習指導要領」の第一・二学年の（ア）「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」、あるいは中学校の第二学年の（イ）「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」、第三学年（ア）「歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと」に沿った授業に関わるものと言える。小・中学校の教育現場で、こうした授業を実施するにあたっての基礎的な能力の育成は、やはり教員を志望する学生本人の学びを充実させてゆくことによっても得られないと考えるのである。

おわりに

教育学部や教育大学に進学し、小・中学校の教員をめざす学生たちのかんりの割合の者が、古典への関心・興味が希薄で、かつ実際の読解力にも乏しいことは、残念ながら否定できないと思われる。大学での学びは、特に高等学校の古典の授業での「古典文法」学習・「古文単語」学習の負のイメージを一度捨て去ることからスタートしなければならぬ。小学校の児童と同じ新鮮な視線で古典教材に向かい合い、音読・暗唱などを通じて音声的な心地よさを体感することも必要となろう。

その次の段階が、本稿で述べてきたように、古典作品のおもしろさを発見し、共感・違和感、あるいは疑問を抱き、そしてそれについて考えるという取り組みである。

そして、こうした過程でなぜ遠く離れた時代の古典をわざわざ学ぶ必要があるのかという思いが湧いて出てくるとすれば、古典に真剣に向かい合っているという何よりの証拠となる。では、古典を学ぶ意味とは如何なるものなのか。

言語的な側面はさておくこととして、主として文化的な側面から考えると、第一の視点としては、古典と現代の「連続性」・古典の「普遍性」が挙げられる。古典に描かれた人間や社会の姿は、まさしく現代に脈々と連なるもので、現代の文化の基盤をなすものと言えらる。古典を学ぶことは、私たちの祖先が積み重ねてきた文化の継承ということであり、その上に立つてこそ、現代の人間や社会への理解が一層深まるのである。

また第二は、第一とは対照的に、古典の「異質性」「特殊性」という点への着目である。古典の学習は、一種の異文化体験あるいは異文化享受と見られることもできることを看過してはならない。異文化の体験・享受は、空間を隔てた海外の文化に接する場合のみに成り立つものではなく、時間を隔てた自国の文化に触れる場合でもまったく同様なのである。古典によって、現代の文化・社会を相対化して捉えることが可能となり、そこを出発点に新しい思考も呼び起こされるのである。

学生たちが、教員をめざすからには、板書・ワークシート・発問などの教育技術を取得することは確かに重要である。しかしそれらの基盤に、古典の作品とそ

の背景への広い知識、豊かな解釈力、そしてそれを的確に説明できる能力があったこそ、小学生・中学生の学びの各段階に必要なものを取捨選択して指導をなすことができるのである。如上の力の養成には、要素を吟味し、精選した授業科目の提供・教育方法の確立が、教育学部や教育大学でなされねばならない。今後、こうした課題に教科教育の研究者と教科専門の研究者、双方の連携が一層求められることと考えている。

注

- (1) 『月刊国語教育』(二六卷八号、二〇〇六年十月)に「特集生徒をとらえる古典の授業」、『教育科学国語教育』(七三三三号、二〇一一年二月)に「特集古典で身につけさせたい国語学力」が生まれ、多くの実践報告がなされるものを代表として挙げておく。また、竹村信治「何を読むのか―教科書の中の古典「文学」―」(『日本文学』六三卷一、二〇一四年一月、二一七頁)は殊に示唆的な論考である。

- (2) 平成二十九年(二〇一七)三月告示の「学習指導要領」の当該箇所を以下に挙げておく。傍線を稿者が私に付しておいたように、小・中学校のすべての学年に「親しむ」の文言が入っているのが目につく。

小学校

【第一・二学年】

(ア) 昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむこと。

【第三・四学年】

(ア) 易しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗誦したりするなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。

(イ) 長い問使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。

【第五・六学年】

(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。

(イ) 古典について解説した文章を読んだり作品の内容の大体を知ったり

することを通して、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

中学校

【第一学年】

(ア) 音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむこと。

(イ) 古典には様々な種類の作品があることを知ること。

【第二学年】

(ア) 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界に親しむこと。

(イ) 現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知ること。

【第三学年】

(ア) 歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむこと。

(イ) 長く親しまれている言葉や古典の一節を引用するなどして使うこと。

(3) 国立教育政策研究所による「平成十七年度教育課程実施状況調査」において、「古文は好きだ」「漢文は好きだ」という項目に「そうは思わない」または「どちらかといえばそうは思わない」という否定的な回答をした生徒（高校三年生）の割合が、古文七二・六％、漢文七一・二％であったという結果は、あまりにもしばしば言及されるところであろう。鳴門教育大学に入学してくる学生たちの傾向と大きくは相違しない状況のように思われる。

(4) 近年の『万葉集』に関する授業提案としては、森頭子「小中をつなぐ古典学習の提案(1)―和歌(『万葉集』)・『竹取物語』を事例として―」(『研究紀要』四七号、二〇〇九年五月、一三―二二頁)、上野誠「模擬授業の中の万葉集―〈授業芸〉の誕生(教育と研究)―」(『国語と国文学』九二巻一―号、二〇一五年十一月、八一―九一頁)がある。また『古今和歌集』については、鈴木宏子「反実仮想の歌―教育学部の授業から―」(『千葉大学教育学部研究紀要人文・社会科学系』五三号、二〇〇五年二月、四四五―四四八頁)、鈴木宏子「古今和歌集の恋歌について―「構造論」の授業における可能性―」(『千葉大学教育学部研究紀要人文・社会科学系』五四

号、二〇〇六年二月、三六六―三七〇頁)、両者ともに扱うものとして、東聖子「詞華集(アンソロジー)を作る授業―感性を磨く教育―」(『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』四三号、二〇一二年、九七―一〇四頁)、板東智子「ICT環境を活用した古典授業の開発(1)―三大和歌集(中3)―」(『全国大学国語教育学会発表要旨集』一八号、二〇一五年五月、二八三―二八六頁)などが参考となる。

(5) 菊川恵三「新学習指導の(伝統的な言語文化)と古典教育」(『日本語学』二八巻三号、二〇〇九年三月、四〇―四八頁)。

(6) 以下、本稿においては『万葉集』『古今和歌集』『枕草子』『竹取物語』『無名草子』を引用するが、本文はすべて新編日本古典文学全集(小学館)による。ただし、稿者の判断でルビのほとんどは省略した。また私に傍線などを付している。

(7) 『枕草子』の授業への提言はかなりの数になる。最近のものを挙げると、金子直樹「比べ読みで身につく学力―古典学習指導の実例―『枕草子』の授業から(1)―」(『中等教育研究紀要(広島大学附属福山中・高等学校)』五〇号、二〇一〇年三月、一四一―一四六頁)、金子直樹「比べ読みで身につく学力―古典学習指導の実例―『枕草子』の授業から(2)―」(『中等教育研究紀要(広島大学附属福山中・高等学校)』五一号、二〇一一年三月、二〇一―二〇六頁)、蔭山江梨子「文学的随筆(エッセイ)を読む魅力と言語技術―『枕草子』を例に―」(『言語技術教育』二二号、二〇一二年三月、一二六―一二九頁)、加藤直志「清少納言評を読み比べる―高校二年生・古典(古文・漢文)の授業実践―」(『同志社国文学』八二号、二〇一五年三月、一二九―一四一頁)、菅原利晃「古典に親しませる学習指導―公任への挑戦『枕草子』二月つごもりころに―の授業―」(『国語論集』一二号、二〇一五年三月、一〇三―一〇六頁)など。また、教科書における『枕草子』の扱われ方の研究として、東望歩「教科書の中の『枕草子』」(『日本文学』六三巻一号、二〇一四年一月、一八―三〇頁)が詳しい。

(8) 『竹取物語』にも多くの授業提案があり、やはり近年のいくつかを示しておく。西俊六「思考型読解力を育む授業の一考察―中学校一年『竹取物語』の授業取材を通して―」(『盛岡大学紀要』二四号、二〇〇七年三月、一二

- 五（一四〇頁）、佐藤洋一・有田弘樹「伝統文化（古典）における「習得・活用」の授業開発―「竹取物語」のテキスト形式をめぐって―」（『愛知教育大学研究紀要教育科学編』六一号、二〇一二年三月、一四七―一五五頁）、古田雅憲「竹取物語―授業化の構想―絵本「かぐや姫」を援用する音読学習の試み―」（『人間科学論集』八巻二号、二〇一三年二月、一―二五頁）、福田景道「古典文学教材としての『竹取物語』―教科内容学からの授業デザイン―」（『島根大学教育学部紀要（教育科学・人文・社会科学・自然科学）』四八号、二〇一五年二月、六三―七二頁）、武久康高「物語の始まり」としての『竹取物語』―『竹取物語』の教材価値とその授業案―」（『高知大学教育学部研究報告』七七号、二〇一七年三月、三三―四四頁）。
- （9）市古貞次校注、岩波書店、一九五八年。
- （10）「浦島太郎」の国語科教育サイドからの研究はそれほど多数ではなく、松原一義「浦島太郎の物語と教科書」（『鳴門教育大学研究紀要人文・社会科学編』一七号、二〇〇二年三月、一―一頁）、中嶋真弓「小学校国語教科書教材「浦島太郎」採録の変遷」（『愛知淑徳大学論集文学部・文学研究科篇』三五号、二〇一〇年三月、五七―七八頁）、吉光寺勝己「生徒に学習意欲を喚起させる古典教材の扱い方―生徒の「想像力」を生かした授業展開を通して―」（『国語教育史研究紀要』一三号、二〇一三年三月、一九―二七頁）がある。
- （11）「一寸法師」についても、あまり国語科教育での論は見られないが、次のものが参考となる。神谷爲義「狡猾型「一寸法師」の教材価値の研究―幼児・児童による誠実型と狡猾型の「一寸法師」の比較をとおして―」（『研究紀要』一号、二〇一〇年三月、五―二〇頁）。

Fostering the Ability to Develop Lessons in Japanese Classical Literature for Elementary and Junior High Schools in Japan

KOJIMA Akiko

Several years have passed since classical literary education was extended to elementary schools as part of the Japanese language subject under the New Course of Study announced in March 2008. At present, however, college students in Japan aiming to become either elementary or junior high school teachers do not necessarily have a strong interest in classical literature or a strong ability to read and understand it. This study addresses the question of how best to equip these students with the ability to develop lessons for use in schools. Specific examples are presented of lessons covering three areas of classical literature—*waka* (*tanka* poetry and others), essay literature, and tales—implemented by the author at Naruto University of Education. Moreover, the need for (a) wide-ranging knowledge of classical literary works and their backgrounds, (b) sound interpretation ability, and (c) the ability to explain texts accurately is indicated along with the methods for developing these.